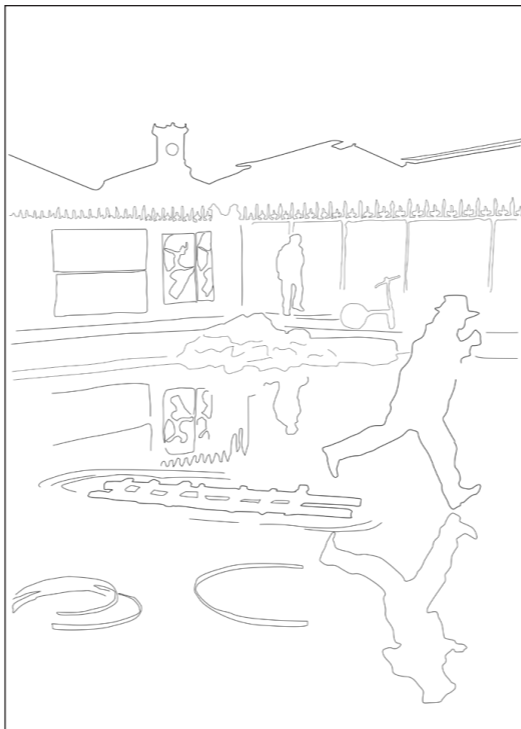


写真の町 通信号外12

この写真、テレビやネット、ポスターなど、どこかで見たことありませんか。もちろん見たことがないという方にも！写真にまつわるお話と共にご紹介！

Vol.22

どこかで見た写真

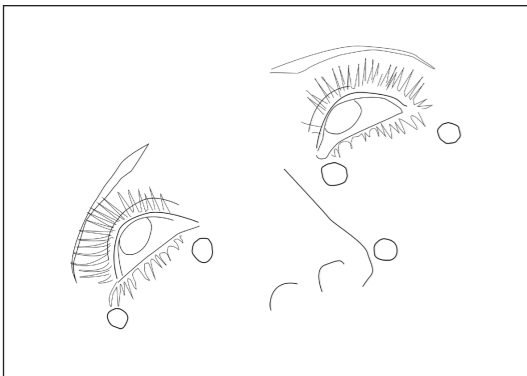


「サン＝ラザール駅裏」
アンリ・カルティエ＝ブレッソン
(1908-2004 フランス)

構図の美しさで知られるフランスの写真家、アンリ・カルティエ＝ブレッソン。

中でも代表的なこの一枚は、この後の出来事を見る人に想像させる作品でありながら、人物と似たポーズの絵とそれが映った水面、波紋と手前にある輪っか、柵とハシゴ・・・など呼応し合う要素が散りばめられた、まるで並べたかのような配置です。

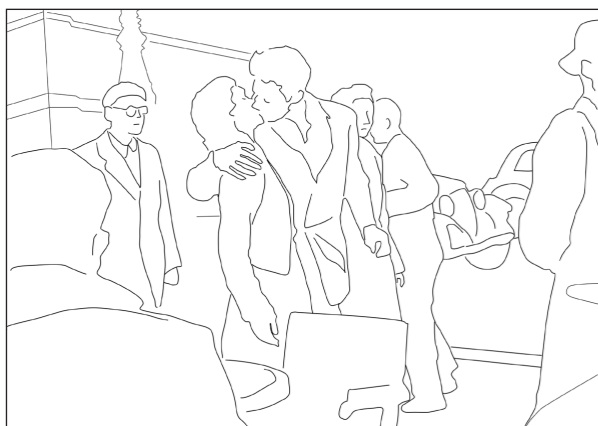
ブレッソンの写真を形容する際や、写真の美学を語るときによく使われる「決定的瞬間」というフレーズですが、これはブレッソンの写真集のタイトルから生まれたもの。実は、52年にフランスのヴェルブ社から刊行されたときのタイトルは『Image à la Sauvette』で、「消え去るイメージ」や「すり抜けていく映像」と訳されます。それが写真集がアメリカで出版される際に『The Decisive Moment』と名付けられ、それを日本語にしたもの「決定的瞬間」が浸透し現在に至っているのです。



「ガラスの涙」
マン・レイ
（1890-1976 アメリカ）

アメリカで生まれたマン・レイは、フランスを中心に活躍していた画家であり写真家であり、彫刻家。ダダイズムやシュールレアリスムといった芸術の流れの中に登場する作家です。多くの芸術家に影響を与えており、写真ではなく、美術について調べているうちに観た！という方もいるかもしれません。ブレッソンも彼の作品に刺激され写真を志したそうです。

ダダイズム：第一次世界大戦中にヨーロッパやアメリカの都市で起きた芸術運動。従来の価値観の否定・破壊を思想としています。
シュールレアリスム：夢・幻想など潜在意識的な世界を表現することで人間の開放を目指すという思想。



「パリ市庁舎前のキス」
ロベール・ドアノー (1912-1994 フランス)

東京都写真美術館の外壁にも大きく掲げられている、フランスの写真家ロベール・ドアノーによる写真。1950年に米雑誌『LIFE』に「パリの恋人たち」というテーマを受けモデルを雇い“奇跡の瞬間”を演出した写真です。80年代にポスターとして発売され世界中に広まり、カップルの美しいキスが「愛の国フランス」を象徴する歴史的な1枚となりました。

観たことがある！という方が一番多そうな写真です。

ロバート・キャパという人物は当初、ハンガリー出身のアンドレ・フリードマンと、その公私にわたるパートナー、ドイツ人女性ゲルダ・タローによって創られた人物でした。1934年にパリで出会い意気投合した二人は、1936年春に「ロバート・キャパ」という架空の名を使って報道写真の撮影と売り込みをはじめ、仕事が軌道に乗りはじめてほどなく、フリードマン自身が「キャパ」として、タローも写真家として自立していきます。こうした経緯もあり、どちらが撮影したものか判断することが困難である写真も多いそうです。



「崩れ落ちる兵士」
ロバート・キャパ
(1913-1954 ハンガリー)

この写真は1936年フランスの雑誌『ヴェ』に「死の瞬間の人民戦線兵士」というタイトルで掲載。翌年に写真が影響力の大きかったアメリカのグラフィック誌『LIFE』に掲載されたことで、写真家ロバート・キャパと「崩れ落ちる兵士」と呼ばれるこの写真は一躍有名になりました。

この写真については様々な疑惑があり議論が交わされ続けています。しかし、この作品は反戦の象徴として広まり、キャパは写真家集団・マグナムの創設に関わるなど、世界に多大な影響を与えた写真家と作品であることには違いありません。

マグナム：写真家自身によってその権利と自由を守り、主張することを目的として創設。20世紀写真史に大きな足跡を残す多くの写真家を輩出しました。

「楽園への歩み」
ユージン・スミス
(1918-1978 アメリカ)

ユージン・スミスは、第二次世界大戦で重傷を負い、長い間後遺症に苦しんでいました。再び写真が撮れるかもわからない療養生活の中で撮った、木々の影から暖かな陽光へと歩いていく我が子の写真は、彼が取材し続けた水俣の写真と並び、スミスの代表作と言われている写真です。

1955年に、世界の写真家273人、503点に及ぶ作品から構成され、ユネスコの世界記録遺産にも登録された大規模写真展「The Family of Man (人間家族)」で「楽園へのあゆみ」は、写真展の最後を飾る1枚に選ばれました。「楽園への歩み」というタイトルはオペラの曲から引用されています。



「三人の若い農夫」
アウグスト・ザンダー (1876-1964 ドイツ)

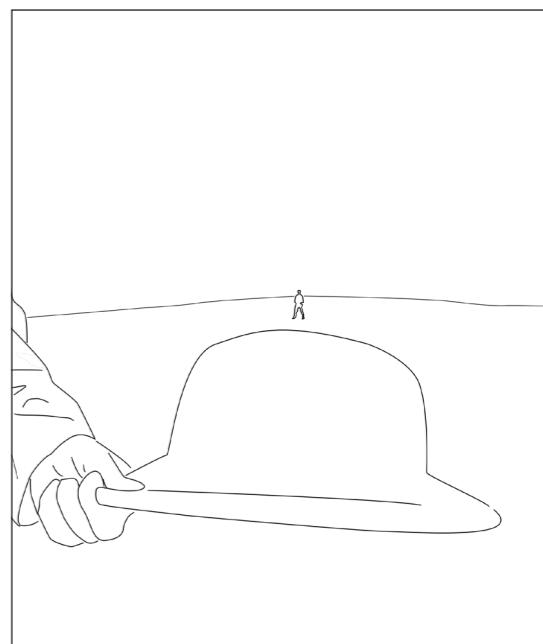
小説好きの方にはお馴染みかもしれません。

現代アメリカ文学の作家リチャード・パワーズはアウグスト・ザンダーの写真と出会ったことをきっかけに当時の仕事を退職し『舞踏会へ向かう三人の農夫』を執筆しました。そのきっかけの一枚であり、表紙にもなった写真が、「三人の若い農夫」です。

この写真はザンダーが生涯をかけて階級や職業を超えて人々のポートレートを撮り続けたプロジェクト「20世紀の人間たち」のうち一枚。このドイツ社会の一時代を写し出すドキュメントは一人の作家の想像力をかき立てるほどの作品となったのです。

シリーズ「砂丘」より
植田 正治 (1913-2000 日本)

東川賞国内作家賞受賞作家でもある植田正治は、世界的にも評価の高い作家です。植田正治は故郷の山陰を中心に作品を撮り続け、砂丘を舞台に様々な演出を施した「砂丘」シリーズのいずれかは目にしたことがあるかもしれません。フランスでも独自の作風が日本語表記そのままの「Ueda-cho」(植田調)という言葉で紹介されています。



文化ギャラリー information

東川町文化ギャラリーは休館中です。
事務所は役場2階に移動しています。

12月1日(火)~1月31日(日)
せんとびゅあIIほんの森“写真コレクション”ミニ特集
「比べて観る写真集」

写真集には復刻版や新装版として新たに再編され出版されているものがあります。装丁や組み方の違いによって感じる写真の見え方の違いを楽しんでください！

フォトフェスタや写真甲子園のフェイスブックやInstagramはご存知ですか？さまざまな出来事を発信しています！ぜひいいね！やフォローをお願いします！



フォトフェスタ



写真甲子園

見覚えのある写真集はあったでしょうか？
記憶に残る写真集はありますか？
ぜひお話を聞かせてください！

